文八

文部省著作

尋常小學讀本 三

發賣所 株式會社 國定教科書共同販賣所

K1
Me

国立国語研究所
72430
図書館

文部省著作

高等小學讀本

三

文部省
檢定許可證

發賣所 株式會社 國定教科書共同販賣所

河西藏書

目録

第一課　伊勢神宮……一
第二課　楠木正行とその母……三
第三課　蜜蜂……八
第四課　虫の農工業……十二
第五課　蠅と蜘蛛とに助けられた話……十六
第六課　昆虫の變態……十九
第七課　奈良……二十四
第八課　鳥居強右衛門……二十八
第九課　親切の報……三十一
第十課　水成岩火成岩……三十五
第十一課　がらすの製法……四十
第十二課　秀吉ノ逸事……四十三
第十三課　須磨明石……四十六
第十四課　夏の一日……四十八
第十五課　ふかに追はれた話……五十三
第十六課　動物の體色(一)……五十八
第十七課　動物の體色(二)……六十二
第十八課　虎……六十六
第十九課　風……七十
第二十課　天氣豫報と警報……七十四
第二十一課　海國男子……七十八
第二十二課　ワガ國ノ海軍……八十

高讀三　せいじんぐー。

第一課　伊勢神宮

伊勢神宮は、伊勢の國度會郡五十鈴川のほとりに、あり。

三種の神器の一なる八咫の御鏡を御神體として、わが國の皇祖、天照大神をまつりたてまつれる御社なり。

八咫の御鏡は天照大神の、皇孫、瓊瓊杵尊に「これを見ることと、なほ、われを見るがごとくせよ。」とて、授けたまひしものなり。それより、代代の天皇は、つねに、これを宮中に置きて、尊崇したまひたりしが、崇神天皇の御代にいたり、これをけがさんことをおそれて、大和の國の笠縫邑といふ所に移したまひ、後、垂仁天皇の御代、さらに、今の

神殿の造り

地に、神殿をつくりて、これに移したまひたるなり。

神殿は、すべて、古代風の建築にして、檜の白木にて造り、柱は、地を、深く、掘りて、立てたり。また、屋根は、茅にて、ふき、棟の両端には、千木と、二本の木をうちちがへたるものあり。この神殿は、二十年ごとに、改築せらるれども、かつて、そのさまを改めたることとなし。

境内には、ふるき杉の木、しんしんと、おひしげりて、知らず知らず、崇敬の心をおこさしむ。世に、西行の歌として、

何事のおはしますかは知らねども、
かたふるものに、

かたじけなさに、涙こぼるる。

といふ歌あり。よく、そのさまをうつしたり。

伊勢神宮は、かかる、たふとき御社なれば、代代の天皇の崇敬したまふはいふにおよばず、年年、伊勢参宮として、各地より、参拝するもの、はなはだ多し。

第二課　楠木正行とその母。

後醍醐天皇の延元元年に、足利尊氏は、弟の直義と、數十萬の大軍をひきゐて、九州から、京都の方へ、攻め上って來た。天皇は、たいそー、おどろかれて、楠木正成に命じて、新田義貞と、これを、攝津の國の兵庫で、防がしめられた。

訓

正成は「今度の合戰がさいごの合戰となるかも知れない。」と思ったので、攝津の國の櫻井驛に、來た時、子の正行に、死後の事を、いろいろ、言ひふくめ、菊水の刀をわたして、故郷の河内の國に、かへらせた。その時、正行は、やうやう、十一歳であった。

正成は、それから、進んで、湊川で、直義と戰って、とーとー、討死してしまった。

尊氏は正成の首を取って、京都の六條河原に、さらした。しかし、「あとの妻子が、さぞ、見たく、思ふであらう。」と思って、その後、その首を正成の遺族に送り届けた。正成の妻と正

止

行とは、正成が、兵庫へ、たつ時、いろいろ、言ひ置いたこともあり、また、櫻井驛で、正行に言ひふくめたこともあるので、かねて「かう、ならう。」とは、思ってゐたが、いまのあたり、その、かはりはてた首を見ては、胸もふさがり、氣も遠くなって、しばらくは、なげきの涙を止めかねてゐた。

やがて、正行は、つと、立って、流れる涙を、袖で、おさへながら、佛間の方へ、行った。母は、ふしぎに思って、そっと、あとをつけて、行って見ると、正行は、櫻井驛で、父から、もらった菊水の刀を、ぬき、袴の腰をおしさげて、いまや、腹につきたてようとしてゐる。

安　　別

母は、おどろいて、かけよって、正行の小腕にとりついて、泣く泣く、いましめて、言ふには、

『栴檀は、二葉より、かうばし。』といふ諺がある。おまへは正成殿の子ではないか。いかに、幼いといっても、このくらゐのことに、まどって、よいものか。まー。よく考へて見るがよい。櫻井驛で、父上にお別れまうしたとき、父上は、何と、おっしゃった。『たとひ、父の武運がつきて、討死するよーなことがあっても、一族、家來、一人でも、生き殘ってゐる間は、いま一度、軍をおこして、尊氏らを亡して、天皇陛下の御心をお安めまうせ。』と、くれぐれも、おっしゃった

といったではないか。その時、歸って來て、この母に話して聞かせたものが、いつの間に、忘れてしまったのか。そんなことでは、天皇陛下のお役に立つことはおろか、父上の忠義もむにしてしまふだらう。」

といって、正行の手から、刀を取りあげてしまった。正行は、そのばに、泣き倒れた。

正行は、その後は、父の遺言、母の教訓が、身に、しみじみと、しみわたって、ほかの子どもと、遊ぶ時にも、尊氏を追っかけるまねをしたり、尊氏の首をとるまねをしたりして、ゆめにも、その事を忘れなかった。

群　體

第三課　蜜蜂(ミツバチ)。

蜜蜂(ミツバチ)ハ、群ヲナシテ、野山ノ木ノウロナドニ、巣(ス)ヲツクルモノナレドモ、マタ、人ノ家ニ飼(カ)ハレテ、箱、樽(タル)ナドノ中ニモ、巣(ス)ヲ造ル。

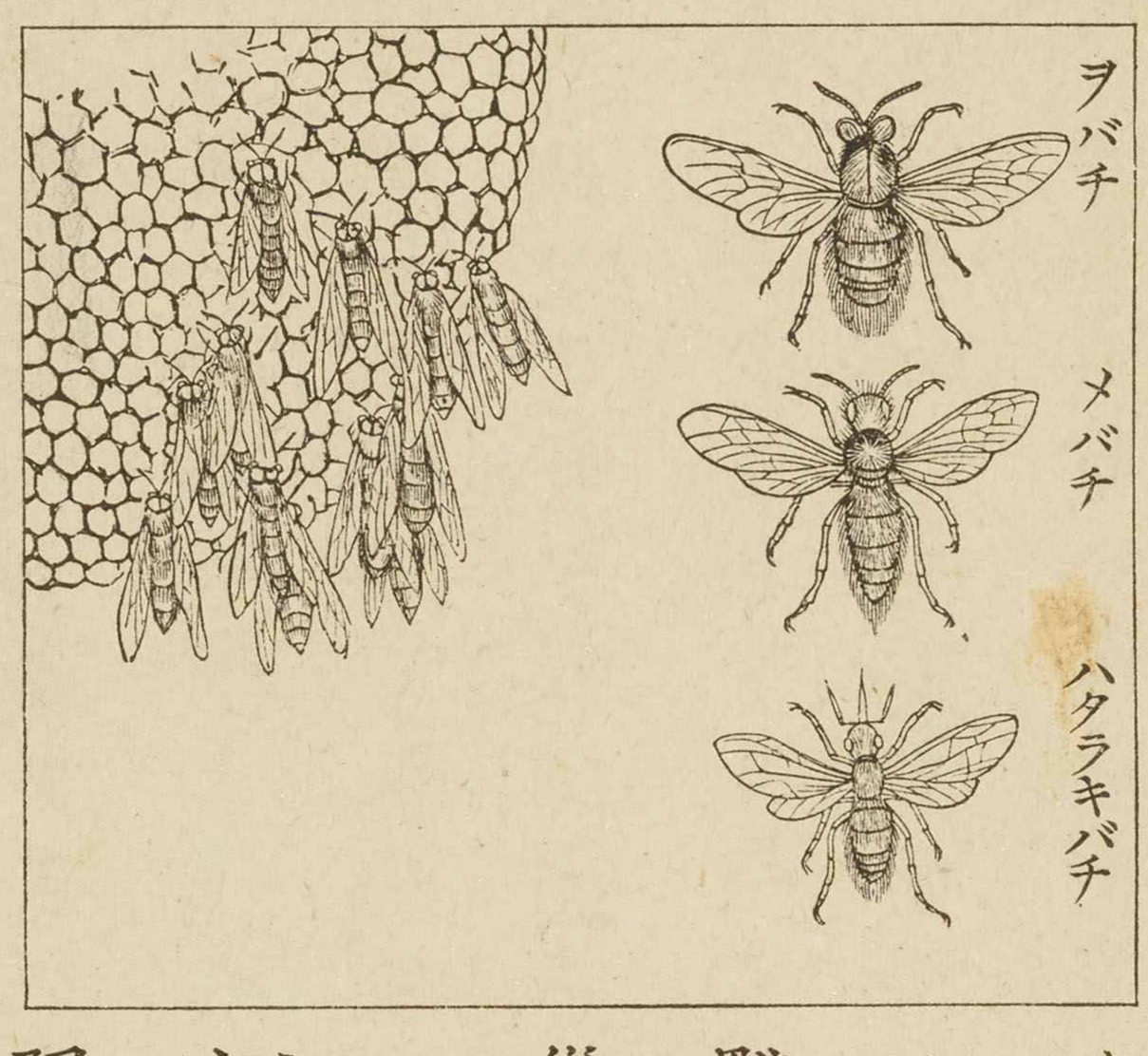
蜜蜂(ミツバチ)、一群ノ數ハ、數千ヨリ數萬マデモアリテ、タガヒニ、力ヲアハセテ、共同生活(キョードーセイカツ)ヲイトナム。群ノ中ニハ、雌蜂(メバチ)、雄蜂(オバチ)、働蜂(ハタラキバチ)ノ三種アリ。

雌蜂(メバチ)ハ、マタ、女王(ジョオー)トモイヒテ、一群ノ中ニ、タダ、一匹(ピキ)アルノミ。體長クシテ、ハネ短ク、ツネニ、巣(ス)ノ中ニ、アリテ、卵ヲ産(ウ)ムヲツトメトス。雄蜂(オバチ)ハ二三百匹(ピキ)アリ。體、イタヅラニ、

勞働

幼虫

小室



大ナルノミニテ、少シモ、勞働ヲナサズ。サレバ、秋ノハジメニイタレバ、コトゴトク、働蜂（ハタラキバチ）ノタメニ、サシコロサル。働蜂（ハタラキバチ）ハ體小サケレドモ、ヨク、勞働シテ、巣（ス）ヲ造リ、食物ヲ集メ、幼虫ヲ養フ事ナドヲツトメトス。

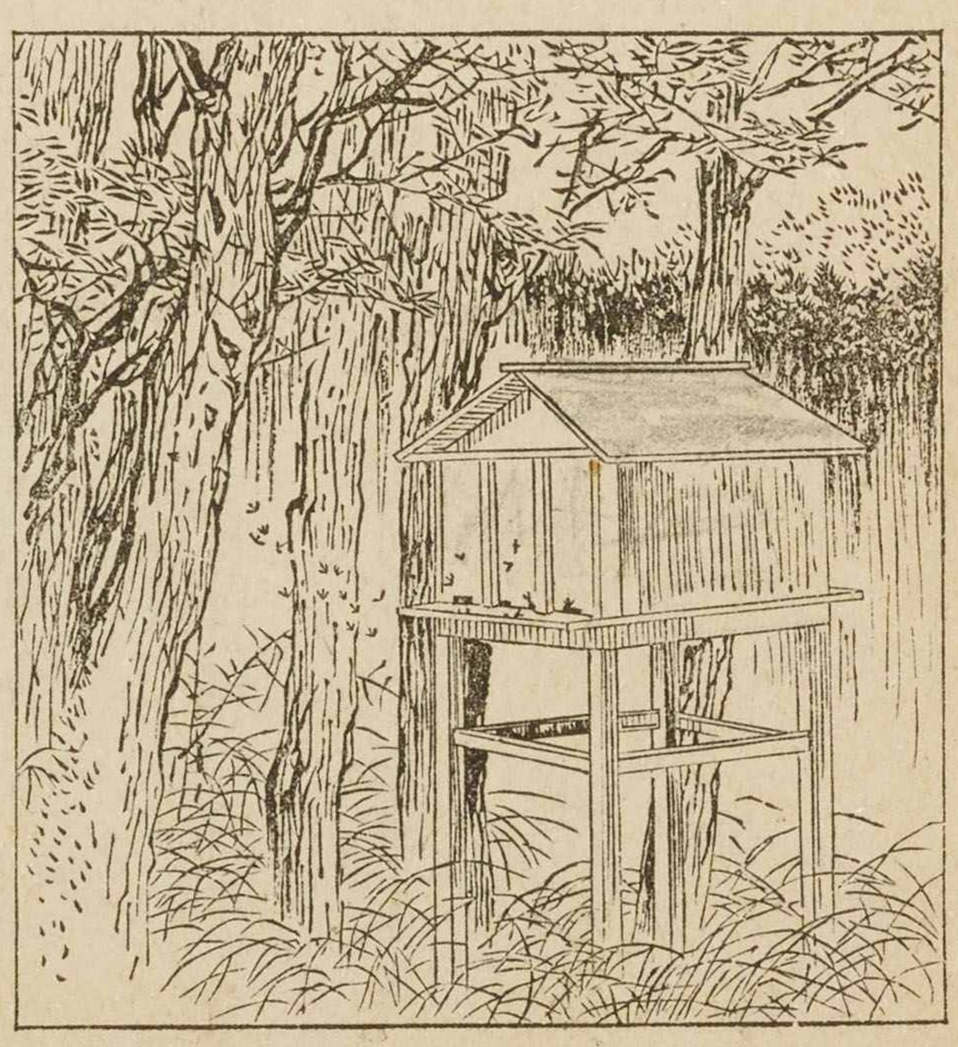
蜜蜂（ミツバチ）ノ巣（ス）ハ六角形（ケイ）ノ小室ノ、數限ナク、密接（ミツセツ）セルモノナリ。コレハ、働蜂（ハタラキバチ）ガ、腹（ハラ）ノ節（フシ）ヨリ、蠟（ロー）ノ薄板（ウスイタ）ヲ分泌（ブンピ）シ、ツバニマゼツツ、造レルモノナルガ、ソノ構造（コーゾー）ノ巧妙（コーミョー）ナルコト、カカル

小虫ノワザトハ思ハレザルホドナリ。蜜蜂ノ巣ハ、コレヲ、湯ニテ、煮トカシ、サラニ、精製シテ、蜜蠟トイフモノヲトル。蜜蠟ハ、膏薬、マタハ、蠟燭ヲ造ルニ用ヒラル。

蜜蜂ノ食物ハ蜜ト花粉トナリ。働蜂ハ花間ヲトビマハリテ、花ノ底ノ蜜ヲ吸ヒ、口ノ奥ノ嚢ニ入レテ、持チ帰ル。シカシテ、蜜ヲ吸フ間ニハ、オノヅカラ、頭鬚、目ナドニ、花粉ノツクモノナレバ、働蜂ハ、マタ、コレヲ前肢ニテ、ハキ、後肢ノ細毛ニ、集メテ、持チ帰リタル蜜ハ、フタタビ、ハキ出シ、花粉ハ、ツバヲマゼテ、塊トシテ、幼虫ト他ノ蜂トノ食料ニアテ、残レルモノハ、コレヲ、巣ノ

貯　怠

中ニ、貯フ。働蜂ハ、春ヨリ秋マデ、花ノアル間ハ、カク、働キ、カク、貯ヘツツ、スコシモ、怠ラザレバ、花、一ツナキ冬トナリテモ、ケッシテ、餓死スルガゴトキコトナシ。蜜蜂ノ蜜ハ、コレヲ精製シテ、蜂蜜トイフモノヲトル。蜂蜜ハ、食用ニモ、薬用ニモセラル。蜜蜂ハ、蜂蜜ト蜜蠟トヲトランガタメニ、昔ヨリ、多ク、人ノ飼ヒタルモノナルガ、今ハ、蚕ナドト同ジク、コトニ、多ク、飼ヒテ、ホトンド、一種ノ家畜ノゴトクナレリ。



増

蜜蜂ハ、五六月ゴロニイタレバ、ソノ群ノ中ヨリ、ソノ一部ノ分ルルコトアリ。コレヲ分封トイフ。分封ハ、働蜂、雄蜂、アラタニ、生レ、マタ、女王、スナハチ、雌蜂ノ生レタル時ニ、オコルモノニシテ、モトヨリノ女王ハ新シキ女王ニ位ヲユヅリ、ミヅカラ、一部ヲヒキヰテ、退去スルナリ。コノ時、新シキ箱、マタハ、樽ヲ、適當ナル所ニ、設ケ置ケバ、退去シタル一群ハ、カナラズ、ソノ中ニ入ル。サレバ、飼フモノ、少シク、注意スレバ、シダイニ、蜂ノ巣ノ數ヲ増サシメテ、マスマス、多ク、蜂蜜ト蜜蠟トヲトルコトヲウルナリ。

第四課　虫の農工業。

似建

虫類の中には、工業、農業に似たる働をなすものあり。いま、これを工業者、農業者のなすわざにくらべみん。

まづ、蚕は、口より、糸をはきて、繭をつくる。これは紡績の業に似たり。また、蜜蜂は、花より、蜜をとり來りて、蜂蜜をつくり、腹より、蠟を出して、巣をつくる。これは酒を造る業と、家を建つる業とに似たり。

次に、蜘蛛は、しりより、糸を出して、網をはる。網をはるには、まづ、幾筋かの縦糸をかけ、次に、中より、外に向って、圓く、あらく、横糸をかく。かくて、ふたたび、この横糸を足場として、外より、中に向って、圓く、みつに、多くの横糸をかくる

編物

なり。これは編物の業に似たり。

次に、蚯蚓（みみず）は、地中に、穴をうがちて、すみ、多量の土をのみこみて、その食用となるものをとり、残の土粉（どふん）は、糞（ふん）として、これを、地上の穴の口に、出す。かくて、數年の後には、地面に近き土をば、まったく、上下にすといふ。これは田畑を耕（たがや）す業に似たり。

次に、蟻（あり）は、その種類によりて、種種の巣（す）をつくる。すなはち、地下に、穴をうがつものあり、穴の内部を、壁（かべ）のごとく、かたむるものあり、小さき砂石を用ひて、石垣（いしがき）のごときものをつくるものあり。また、あるものは、木、草などの小

重片

片を、多く、積み重ね、あるものは、塔のごとき、高きものをつくりて、木質にて、内部をかたむ。これらは土木の業に似たり。

實

蟻には、收穫蟻といふ、一種の蟻あり。あめりかの、ある地方に、産し、ある草の實を食用とす。されば、つねに、この草の、多く、生じたる所に、すみ、その周圍の雑草をくひきりて、その成長を保護し、その實の、熟して、地に、落つるにいたりて、これを、その巣に、運ぶといふ。これは收穫の業に似たり。

蟻は、また、ありまきを養ふ。ありまきは、植物の若芽、若葉

などに群り着きて、その植物の汁を吸ひ、身體より、たえず、甘き汁を出すものなれば、蟻は、この甘き汁を吸はんがために、ありまきの附着せる植物に、集りて、これを保護し、あるひは、その卵を運びて、他の植物に移して、成長せしむ。これは牧畜の業に似たり。

第五課　蠅と蜘蛛とに助けられた話。

昔、ある國に、一人の王子があった。蠅と蜘蛛とがだいきらひで、「もし、じぶんの思ふままになるものなら、蠅と蜘蛛とは、一匹も殘さず、この世界から、追ひはらってしまひたいものだ。」と思ってゐた。

烈　眠　寄

ある、烈しい戰爭の時、王子は、敵にやぶられて、どこにか、かくれねばならんばあひになった。そこで、王子は、ある森の中に逃げこんで、大きな木のかげに、かくれてゐた。ところが、幾日もつづいた戰爭の疲が出て、思はずも、うとうと、眠りだした。

敵の一人がそれを見つけて、刀をぬいて、王子のそばにしのびよった。

ちょーど、その時、蠅(はへ)が、一匹(ぴき)、とんで來て、王子の顏をはひまはった。王子は、それで、目をさました。見ると、敵が、まぢかく、寄って、じぶんをささうとしてゐる。王子は、おどろいて、むっ

くと、立ち上って、みがまへした。敵は、その勢に、恐れて、逃げてしまった。

その夜、王子は、その森の中にある、木のうろの中にはいって、ねた。ところが、夜のうちに、蜘蛛が、そのうろの口いっぱいに、巣をかけた。

夜明ごろ、敵が、ふたり、王子をさがしに、來て、その木のそばを通りかかったが、一人がそのうろを見つけて、

「見よ。ここに、大きなうろがある。王子は、ひょっとしたら、この中にかくれてゐるかも知れんぞ。」

といった。すると、ほかの一人が

「なに。いくれてゐるものか。見よ。この蜘蛛が、き

破

「なに。かくれてゐるものか。見よ。このとほり、蜘蛛が、きれいに、巣をかけてゐるではないか。王子がかくれたのなら、この巣の破れてゐないはずはない。」

といった。二人は笑ひながら、先の方へ、いそいで行った。

二人の影が見えなくなったじぶんに、王子は、うろの中から、出て來て、ほっと、息をついた。そして、一度ならず、二度までも、危い命の助かったのを喜んだ。また、その助かったのが、そろひもそろって、じぶんのだいきらひな蠅と蜘蛛とのおかげであったのを、いかにも、ふしぎに思った。

第六課　昆虫の變態

飛

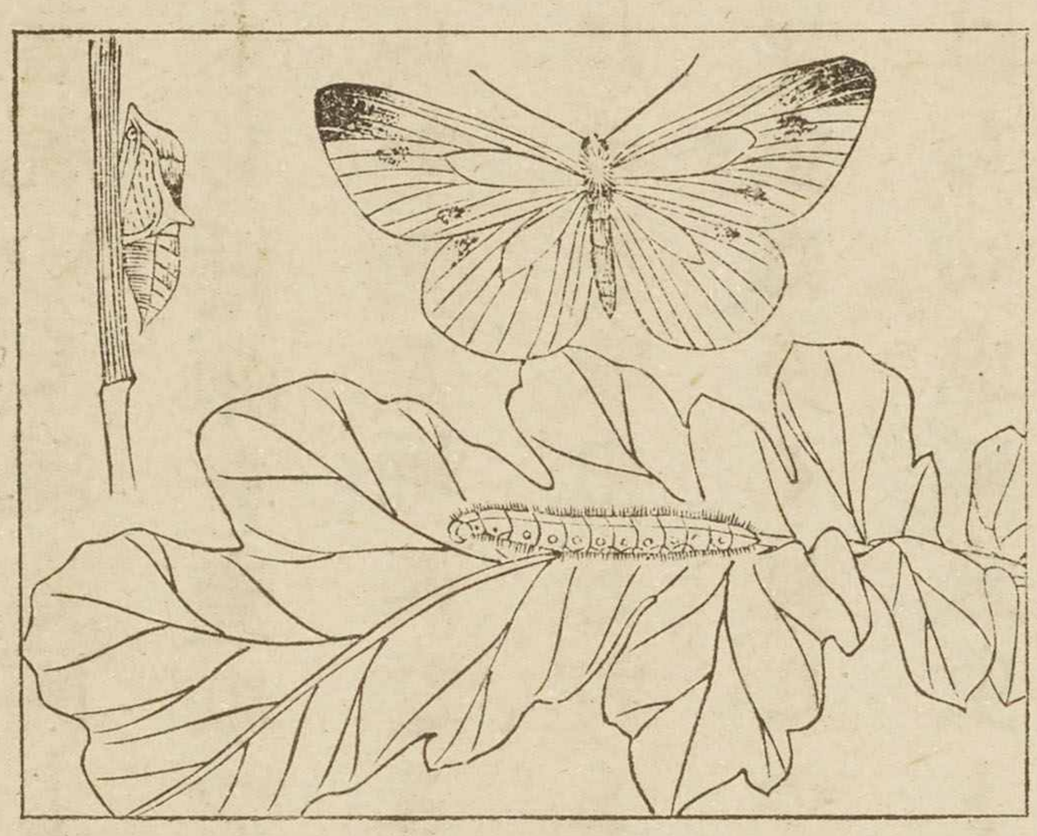
昆虫（こんちゅう）といふのは足の六本ある虫類のことである。昆虫（こんちゅう）は、多くは、はねがあって、空中を飛ぶことができる。空中を飛ぶ動物の中で、鳥類とかうもりとをのけると、あとは、みな、昆虫（こんちゅう）である。

昆虫（こんちゅう）の中には、ちょーちょのよーに、おもしろさうに、まひをまふものもあり、松虫や鈴虫（すずむし）のよーに、よい聲で、なくものもあり、蚕のよーに、美しい繭（まゆ）をつくるものも、蜜蜂（みつばち）のよーに、甘い蜜（みつ）をこしらへるものもあるが、また、蚊（か）やのみのよーに、動物の血を吸ふものも、いなごゝ、うんかゝ、ばったなどのよーに、農作物を荒すものもある。

などのように農作物を荒すものもある

緑

すべて、昆虫は、みな、卵から、かへって、親と同じ形の虫となるのであるが、多くは、その間に、二三度、形をかへるものである。昆虫の變態といふのは、この、形をかへることをいふのである。

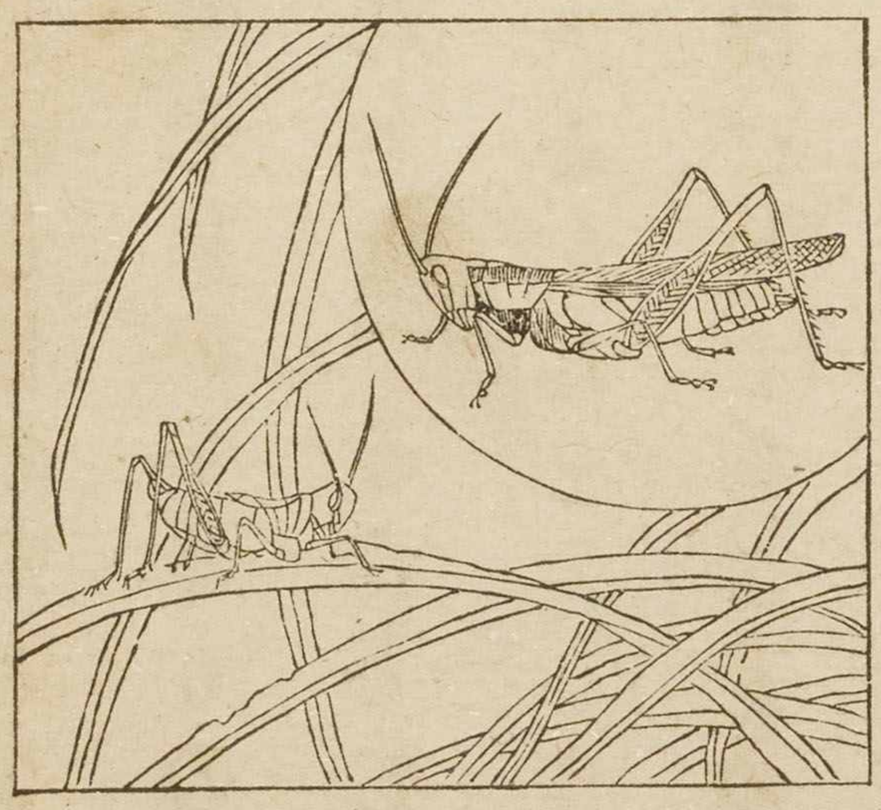


たとへていへば、白いちょーちょは、その卵がかへると、まづ、いもむしのよーな形の、緑色の虫になる。この虫は、さかんに、大根などの葉をくひ、たびたび、皮を脱いで、だんだん、大きくなる。そして、じゅーぶん、大きくなると、くふことをやめて、また、

脱

形をかへて、蛹になる。この蛹は、しばらくたつと、また、皮を脱いで、親と同じ形の、白いちょーちょになる。この、白いちょーちょは、卵を産みつけて、死んでしまふ。學問上では、卵から、かへって、蛹になるまでを幼虫といひ、親と同じ形になったのを成虫といふ。

昆虫は、多くは、この變態の順序、すなはち、幼虫、蛹、成虫といふ、三つの順序をへるものであるが、中には、この區別の、よく、わからないものもある。たとへていへば、いなごは、その卵がか



特別

へると、ほとんど、成虫と同じ形の幼虫になる。ただ、頭が、わりあひに、大きくて、はねが、見えないくらゐ、小さいだけである。

このいなごのよーなものは特別であるが、たいていのものは、その幼虫である時と、成虫になった時とでは、その形が、まるで、違ってをるので、ちょっと、みたところでは、全く、別な種類の虫であるよーに思はれる。たとへていへば、いもむしやけむしはちょーちょや蛾の幼虫で、ぼうふりむしは蚊の幼虫、たいこむしはとんぼの幼虫であるが、どうして、それが、それぞれ、同じ虫であると思はれようか。

皇居　都　寺

第七課　奈良。

奈良は奈良朝、七代、七十餘年の間、御代代の都のありしところなり。その當時は、皇居をはじめとして、神社、佛閣、所所に、立ちて、はなはだ、盛なりしが、桓武天皇の都を山城の國に移したまひしより、しだいに、さびれゆきて、つひには、都の跡も田畑とかはるにいたれり。

されど、その當時の春日神社、東大寺、興福寺などのごとき、大いなる社寺は、その後も、なほ、盛にして、今の奈良市の基をなすにいたれり。

春日神社は、奈良市の東にある春日山の麓に、あり。境内

には、ふるき杉の木、晝も暗きばかりに、おひしげりて、多

壯麗

歴史参考

には、ふるき杉の木、晝も暗きばかりに、おひしげりて、多くの鹿、その間に、群れ遊べり。社殿は、壯麗にして、その廻廊には、無數の金燈籠をつりたり。また、社前、路傍などには、石燈籠、きはめて、多し。

東大寺は、春日神社の西北に、あり。東大寺には、大佛殿あり。かの、有名なる大佛は、このうちに、すゑ置かれたり。また、正倉院といふ庫あり。聖武天皇の御遺物などを、多く、藏して、美術、歴史の參考となるべきものすくなからず。

東大寺の東には、嫩草山あり。全山芝生にて、はなはだ、美し。

者曰神社は奈良市の東にある春日山の麓にあり。境内

景色

興福寺は、東大寺の西南に、あり。興福寺には、南圓堂、北圓堂、五重塔などありて、みな、世に、聞えたり。興福寺の南に、猿澤池あり。水清くして、鯉、亀など、多く、すみ、岸の柳、水にうつりて、景色畫のごとし。

その他、都の跡には、西大寺、藥師寺、唐招提寺などあり。奈良市の西南、三里ばかりの所には、法隆寺ありて、みな、名高し。

中にも、法隆寺は、聖徳太子の創立したまひたるものにして、その金堂、講堂、五重塔などは、およそ、一千二百年前のものなりといふ。太子の御遺物、そのころの佛像など、

今、なほ、多く、傳はれり。

のものなりといふ。太子の御遺物、そのころの佛像など、

傳

今、なほ、多く傳はれり。

花のごとくに、榮えたる
奈良の都の面影を、
千歳の後に、なほ、殘す
名所舊蹟數多き
中にも、名高き東大寺。
寺にまつれる大佛の、
その建立は聖武帝。
五丈三尺五寸ある
像をすゑたる佛殿の

圍城

いらか、雲井に、そびえたり。」

第八課　鳥居強右衛門

鳥居強右衛門ハ奥平信昌ノケライナリ。カツテ、信昌ニ従ヒテ、長篠城ニ居タリシトキ、武田勝頼、大軍ヲヒキヰ来リテ、コレヲ圍ミタリ。城兵、力ヲツクシテ、防ギ戦ヘドモ、兵糧、シダイニ、乏シクナリテ、今ハ、ホトンド、ササヘガタキニイタレリ。

アル日、信昌ケライヲ集メテ、「敵軍ワガ城ヲ、十重ニ、圍ミテ、蟻ノ通ハンスキダニ見エズ。ワガ兵糧ハ、スデニ、ホトンド、ツキタリ。ワレラハ水ノタエントスル池ノ魚ニコ

ナラズ。コノウヘハ、濱松ニオハスル徳川家康公ノ力

謹　　到

トナラズ。コノウヘハ、濱松ニオハスル徳川家康公ノ力ヲ借リテ、敵ヲ退クルヨリホカニ、手段ナシ。コレヨリ、城ヲ出デテ、濱松ニ行キ、公ニマミエテ、使ノヤクメヲ果スモノハナキカ」トイヘリ。ケライ、ミナ、目ヲ見合セテ、答フルモノナシ。コノトキ、強右衛門進ミ出デテ、「カカル時ニハ、命モ惜ムベキニアラズ。ワレ、謹ンデ、ソノ使トナラン」。トイヒタリ。信昌、喜ビテ、使ヲ強右衛門ニ命ジタリ。

強右衛門、夜、城ヨリ、出デ、川底ヲクグリテ、ヒソカニ、敵陣ノ間ヲスギ、ハセテ、濱松ニ到リ、家康ニマミエテ、クハシク、ソノシダイヲノベテ、救ヲ乞ヒタリ。家康、コレヲ聞キ

シド、ツキタリ。ワレラハ水ノタエントスル池ノ魚ニコ

捕暇

テ、ソノ乞ヲ許シ、「明日、軍ヲヒキヰテ、出發スベシ。ナンヂモトドマリテ、トモニ、行クベシ」。トイヒタリ。サレド、強右衛門ハ「スコシモ、早ク、歸リテ、ミカタニ知ラセン」。ト思ヒテ、タダチニ、ヒキカヘシタリ。

カクテ、夜、シノビテ、城ニ入ラントシタルニ、不幸ニシテ、敵ニ見出サレテ、捕ヘラレタリ。敵將、勝頼、強右衛門ニ向ヒテ、「ワレ、ナンヂニ重キ賞ヲ與フベケレバ、明日、城際ニ、行キテ、『家康公ハ、目下、多事ニシテ、助クル暇ナシトイハレタリ。』トイヘ。シカラズバ、タダチニ、ナンヂヲ烹殺サン。」トイヒタリ。強右衛門、イツハリテ、コレヲ諾セリ。

翌日、壯士、十餘人、白刃ヲ提ゲテ、強右衛門ヲ、城際ニ、ツレ

翌　娘

翌日、壯士、十餘人、白刃ヲ提ゲテ、強右衛門ヲ、城際ニ、ツレ行キタリ。強右衛門城ヲアフギ、大聲ヲ出シテ、「諸君。ウレフルコトナカレ。家康公、スデニ、大軍ヲヒキ卆テ、出發セラレタリ。敵ヲウチヤブリテ、退ケラルルコト、カナラズ、二三日ノウチニ、アラン。」トイヘリ。イヒヲハリテ、ツヒニ、敵ニササレテ、死セリ。

第九課　親切の報。

あめりかの、ある山の中を通ってをる鐵道線路から、すこし、はなれた所に、みすぼらしい小屋をたてて、娘ひとりと、かつかつ、この世を送ってをるやもめがありました。べ

トイヒタリ。強右衛門、イツハリテ、コレヲ諾セリ。

つに、これといふ職業もないので、雞（にはとり）を飼（か）ったり、薪（たきぎ）をとったりして、それを、近くの町に、賣りに、出て、わづかに、くらしをたててをりました。

ある年の春、山の雪がとけて、その水が、いちじに、おし出して、やもめの小屋のそばの谷に架（か）けてある、鐵道の橋をおし流してしまひました。けれども、それは夜中のことで、そのうへに、雨が、ひどく、降ってをったので、そのことを知ってをるものは、この親子のほかには、誰もありません。あー。いまにも、汽車が來たら、車も、人も、みな、谷に、落ちてしまふでありませう。

この時、その親子は『何とかして、その、橋の落ちたことを

しまふでありませう。

線路

この時、その親子は『何とかして、その、橋の落ちたことを知らせたい。』と思って、いろいろと、そのてだてを考へたすゑに、やっと思ひついたのは、薪(たきぎ)を、鐵道線路の上に、積み重ねて、それをたくことでありました。そこで、ふたりは、さっそく、薪(たきぎ)を運んできて、それに火をつけました。

結

まもなく、ごーごーと、音がして、機關(きかん)車のあかりが見えはじめました。しかし、まだ、機關(きかん)手がその火を見つけんのか、汽車は、たいそー、早く、來ます。そこで、母親は、じぶんの着てをる着物をさいて、竿(さを)のさきに結びつけ、それに火をつけて、高く、さしあげながら、線路の上をかけまは

乘客

りました。娘も、これにならって、木の枝に火をつけて、高く、さしあげながら、かけまはりました。けれども、まだ、きづかはしいので、「車をとめよ。車をとめよ。」と、聲のつづくだけ、さけびました。

すると、機關手は見なれん火を見つけ、人のさけぶ聲をも聞きつけて、「何か、かはった事でもできたのか。」と思って、すぐ、汽車をとめようとしましたが、きゅーには、とまらないで、親子のをる所で、やっと、とまりました。車掌や機關手や乘客などは、みな、汽車から、下りて、そのわけをたづねました。親子は、じぶんたちの力で、人人の命を救ふことが

した。親子は、じぶんたちの力で、人人の命を救ふことができたのを喜んで、人人を、谷の所に、つれていって、見せました。人人はこんなことがあらうとは、夢にも、思ひませんでしたので、「われわれは、まったく、この親子に助けられたのだ。この親子はわれわれの命の親だ。」といって、あつく、礼をのべ、金を出しあって、この親子に贈りました。鐵道會社でも、そのお礼として、金を、たくさん、贈りました。そのおかげで、親子は、いっしょ、らくに、くらしたといふことであります。

第十課　水成岩火成岩

われわれの、ふだん、歩いてゐる所は、地球の外皮である。

皮

贈

柔岩

この外皮は、ちょーど、卵の殻のよーに、内にあるいろいろなものを包んでゐるから、これを地殻といふ。

地殻は、いろいろなものから、できてゐて、柔い土もあり、ばらばらした砂もあり、堅い岩もある。しかし、學問上では、すべて、これらを岩石といふ。

岩石は、これを、そのなりたちから、水成岩と火成岩との二つに、分ける。

水成岩といふのは、水の力で、水の底にできた岩のことである。いったい、岩石は、暑さ、寒さなどのかげんで、だんだん、脆くなり、雨水などのために、しだいに、こはれていく

河

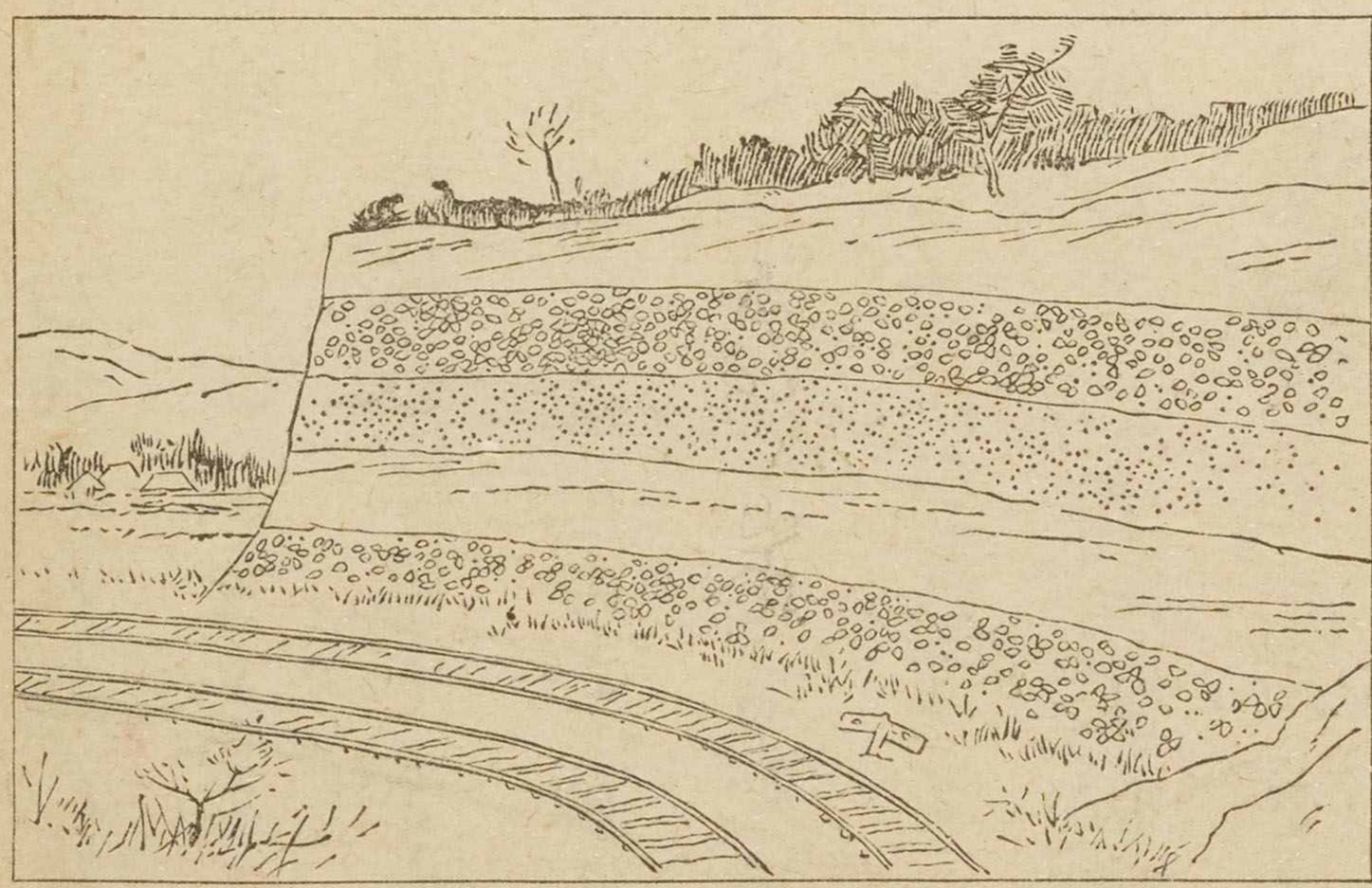
ものである。この、こはれた岩石は、河の中に流れこんで、

ん、脆くなり、雨水などのために、しだいに、こはれていく

河打

ものである。この、こはれた岩石は、河の中に流れこんで、河水に打たれたり、たがひに、すれあったりして、だんだんと、かどのとれた、圓い石になり、またばらばらしたこまかい砂や、どろどろした、いっそーこまかな泥土(でいど)となって、水の勢ののろい所に、來て、水の底に沈んでしまふ。

かういふことが度(たび)かさなると、とーとー、水の底に、板を、幾枚も、



切割

積み重ねたよーな地層ができてくる。われわれが汽車に乗って、旅行する時、をりをり、鐵道線路の切割などで、この地層を見ることがあるが、これは、昔、水の底にできた地層が、何かの地變によって、陸地になってしまったのである。

さて、地層は、前にいったよーにして、できるのであるが、この地層の下部は、上部の、強い壓力のために、かたまって、かたい岩になる。これが、すなはち、水成岩である。石盤、硯、砥石などに用ひる粘板岩、建築用にする凝灰岩、石灰をこしらへる石灰岩などは、みな、この水成岩である。

次に、火成岩といふのは、地球の内部から、ふきだす、あつ

次に、火成岩といふのは地球の内部からふきだすあつい汁がかたまつてできた岩のことである。いつたい、地球の内部には、地熱といふ、非常に、高い熱があるから、すべての物がとけてゐるべきはずであるが、上部の、強い壓力のために、とけずにゐる。これが、地殼に、すきまがあると、たちまち、とけて、あつい汁になつて、ふきだしてくる。その汁は、地中で、または、ふきだしたうへで、冷えて、かたまつて、岩になる。これらが、すなはち、火成岩である。建築用にする花崗岩、安山岩などは、みな、この火成岩である。

すべて、岩石は、どれでも、一つの鑛物から、できてゐるのではなくて、たいていい、二種、三種、または、十數種の鑛物か

瓶

ら、できてゐる。花崗岩の中には、黑い所と、白い所と、白くて光る所とがある。この黑い所は雲母、白い所は長石、白くて光る所は石英といふ、めいめい、一つの鑛物である。そのうち、長石と石英とは、他の岩石にも、たくさん、はいってゐるものであって、長石は、燒物をこしらへる時、石英は、がらすをこしらへる時に、ぜひ、なくてはならんものである。

第十一課　がらすの製法。

がらすの用は、はなはだ、廣し。見よ。らんぷ、藥瓶、皿、こっぷ、鏡、電氣燈のほや、窓の板がらすなどの類より、顯微鏡、望遠

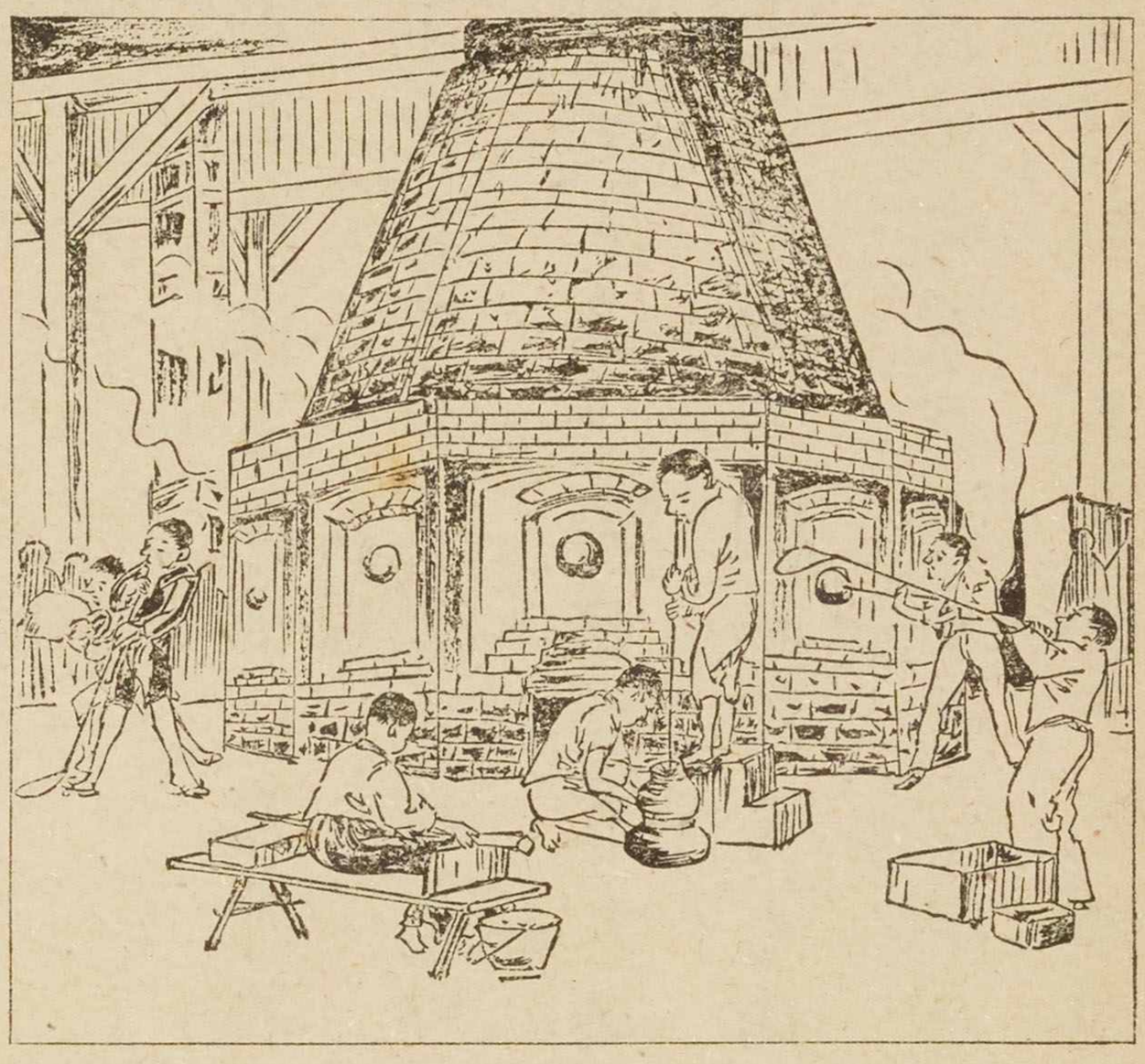
鏡、種種の眼鏡のれんず、寫眞器械に用ふるれんずなど

鏡、種種の眼鏡のれんず、寫眞器械に用ふるれんずなどにいたるまで、みな、がらすにて、造りたるものならずや。じつに、がらすは人間快樂の父、學問進歩の母ともいふべきなり。

がらすは、ふつーに、まじりものなき石英の砂に炭酸そーだ、石灰などをまぜ、るつぼに入れて、強く、熱し、その、とけて、どろどろになりたる時、これを種種の形に造り、しだいに、冷し固めたるものなり。すなはち、らんぷなどのほや、瓶などは、この、どろどろになりたる汁を、がらす、または、鐵の、長き管の先につけて、しゃぼん玉を吹くがごと

電氣燈のほや窓の板ガラスなどの類より顯微鏡望遠

皿



くに、吹きのばし、これを型に入れて、形を正したるものなり。また、板がらすは、かく、吹きのばしたるものを切りひろげて、造りたるものにて、皿、こっぷなどは、かの汁を、ただちに、鑄型に入れて、造りたるものなり。

代

がらすは、前にのべたる石灰の代に、みつだそーといふものをまぜて、造ることあり。顯微鏡、望遠鏡などのれん

生

輸入

ずは、みな、この種のがらすにて、造りたるものなり。この種のがらすは、光強くして、はなはだ、美麗なれば、また、種種の裝飾品を造るに用ひらる。がらすの精良なるものは、いまだ、わが國にては、多く、造られずして、おほむね、外國より、輸入せり。くちをしきことならずや。

第十二課　秀吉ノ逸事。

山城ノ國ニ、内山里トイフ所アリ。秀吉コレヲ梅松トイフモノニ預ケタリ。アルトキ、コノ内山里ニ、松ヲ植ヱシメタルニ、ホドナク、「松蕈生ヒタリ」。トテ、奉リタリ。秀吉笑

もをまぜて造ることあり顯微鏡望遠鏡などのれん

左右

参詣

ヒテ、「ワガ威光（イコー）、マコトニ、サモアラン」ト言ヒタリ。シカルニ、ソノ後モ、ナホ、シバシバ、奉リタリ。コレハ、内山里（ウチヤマザト）ニ、生タルニハアラズシテ、ジツハ、他所ヨリ、モトメテ、奉リタルナリ。秀吉（ヒデヨシ）左右ノモノニ向ヒテ、「松蕈（マツタケ）ヲ奉ルコトハ、モハヤ、ヤメサセヨ。アマリ、生ヒスグルゾ」ト言ヒタリ。

秀吉（ヒデヨシ）、アル日、高野山（コーヤサン）ニ、参詣シタリ。コノトキ、「割粥（ワリガユ）ヲススメヨ」ト言ヒケレバ、シバラクシテ、料理人（リョーリニン）、コレヲトトノヘテ、奉リタリ。秀吉（ヒデヨシ）、大イニ、喜ビテ、「高野山（コーヤサン）ハ、ヒロ（ウス）ナキ所ナルニ、ワガ割粥（ワリガユ）ヲ食ハンコトヲ知リテ、持チテ来リタルコソ感心ナレ」ト言ヒタリ。コレモ、ジツハ、持チ来リタルニ

多

ハ　アラズシテ、ニハカニ、多人數（マナイタ）ニテ、俎板ノ上ニテ、キザ

高讀三
高讀三

怒剣座

ハアラズシテ、ニハカニ、多人數ニテ、俎板ノ上ニテ、キザミテ、割粥トナシタルナリ。後ニ、左右ノモノ、話ノツイデニ、カク、申シケレバ、秀吉、大イニ、怒リテ、「無ケレバ、『ナシ。』ト言ヒテ、事スムベシ。何ユヘニ、サルコトハセシゾ。ワガカニテハ、一粒ヅツ、ケヅリテ、食フモ、心ノママナレドモ、サヨーニ、奢リタルコトハセヌモノゾ。」ト言ヒタリ。

秀吉、アルトキ、山城ノ國ノ伏見ニ、居タリ。アル日、鐵砲ヲ、四五十、放ツ音ノシケレバ、座ニアルモノ、ミナ、「イカガシタル鐵砲ノ音ニカ。」トアヤシミ、ヰタリ。シカルニ、秀吉ハ「カハリタルコトニハ、アラジ。大名ドモガ、鳥ナド打チニ、

高讀三

浦

出デテノ歸ミチニテ、コメタル丸(クマ)ヲウチヌクモノナラン。」ト言ヒテ、笑ヒヰタリ。カクテ、見ニ、ツカハシタルニ、ハタシテ、秀吉(ヒデヨシ)ノ言ヒタルゴトクナリキ。ソノ大名ドモハ、罰(バツ)セラルルコトモヤアラン。」ト、キミワルク、思ヒテ、數日スギテ、秀吉(ヒデヨシ)ノ城ニ伺ヒタルニ、秀吉(ヒデヨシ)笑ヒテ、「先日ノ遊オモシロカリキヤ。」トテ、スコシモ、心ニカケザル有樣ナリキトゾ。

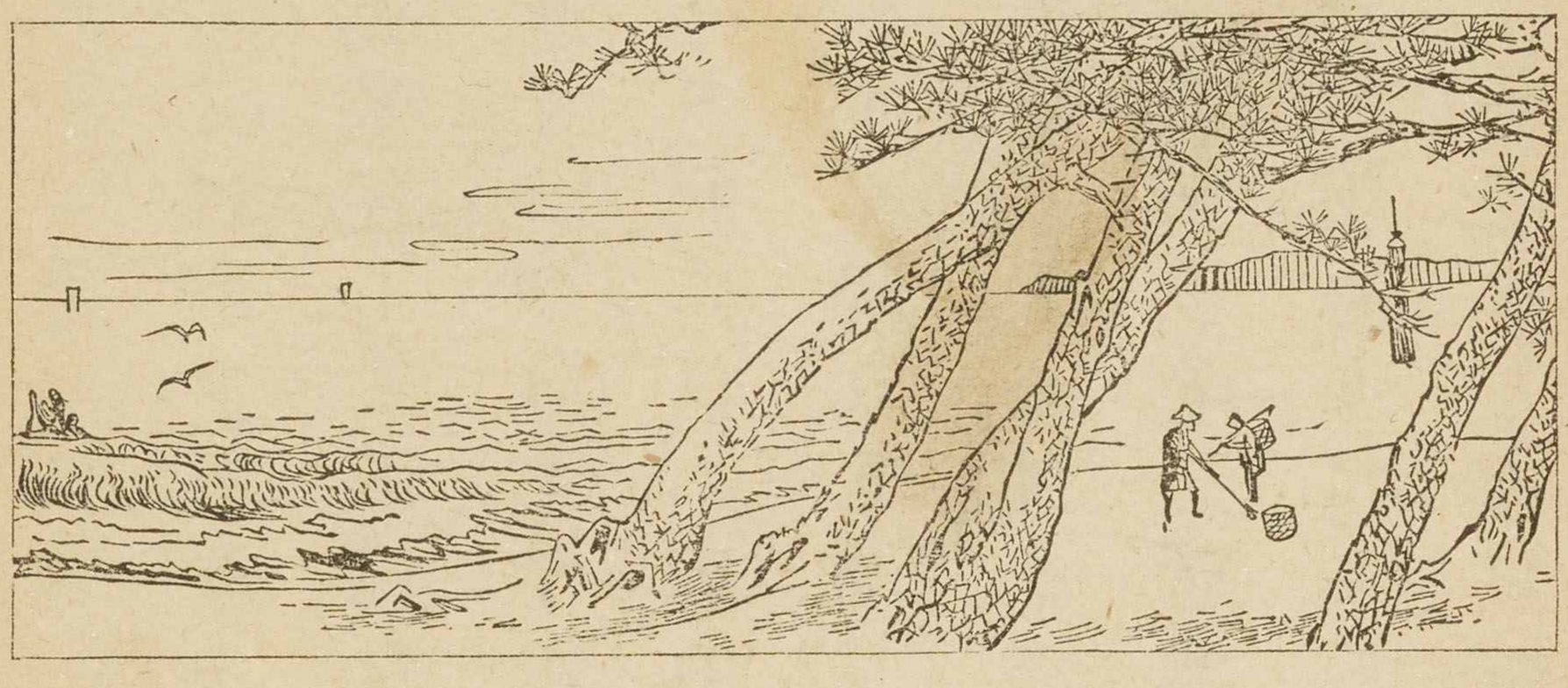
第十三課　須磨(すま)、明石(あかし)。

松は緑に、砂白く、
風景すぐるる須磨(すま)の浦。

拾

磯邊(いそべ)に、出でて、貝拾ふ

音　拾



磯邊に、出でて、貝拾ふ
　子どもたちながめの一つなり。
帆かけて、出づる舟多く、
　朝海にぎはふ明石潟。
明石の城も、人麻呂の
　社も、木の間に、見ゆるなり。
海のあなたに、いと近く、
　見ゆる陸地は淡路島。
通ふ汽船の笛の音も、
　涼しく、波に、ひびくなり。

浦

風景すぐる須磨の浦。

漁家
起
散

第十四課　夏の一日。

ここは、瀬戸内海の、ある入海なり。海面には、あまたの小島散在して、波はなはだ、おだやかに、海岸には、白き砂地、長く、つづきて、すがたおもしろき松、多く、立ちならべり。松の間には、二三の漁家も見ゆ。

朝、早く、起きて、沖の方を見渡せば、なかば、もやにかくれたる島島の間を、多くの漁船の、艪の音勇ましく、こぎ出づるあり。その様、木の葉の、風に、散るがごとし。やがて、その漁船も、しだいに、遠ざかり行けば、かなたの島かげより、太陽、のっと、あらはれて、海は、だちまち、金の波をただよ

はす。また、こなたの岸には、いつの間にか、一群の漁夫、出

はす。また、こなたの岸には、いつの間にか、一群の漁夫、出で來て、網を引けるも見ゆ。

太陽、やうやく、高くなり行けば、おとな、子どもなど、あまた、來り集りて、着物脱ぎては、海に入る。中にも、泳をよくするものは、せおよぎ、立泳、ぬきでなど、思ひ思ひに、遊びて、その様、さも、おもしろげなり。また、かなたには、つばびろの麥藁帽子かぶりたる人の、岩に腰かけて、魚つれるもあり。こなたには、日傘さしたる少女の、濱をつたひて、貝拾へるもあり。

太陽、やうやく、かたむきて、夕方近くなれば、泳ぎあたる

り太陽のとあらはれて海はたちまち金の波をたたよ

濱

人人は、みな、歸り去りて、あとには、老いたる漁夫のほしたる網（あみ）などととりかたづくるを見るのみ。されど、沖の方より、三つ、四つ、二つ、歸り來る漁船見えそむれば、松の木の間の漁家より、女子どもなど、あまた、出で來て、濱、ふたたび、にぎはふ。やがて、かの漁船、岸に着けば、乘りたる漁夫、濱に、とびおり、待ちゐたる人人とともに、おのおの、大いなる籠（かご）に漁船の魚を取り入れて、喜びさわぎながら、にぎはひ行く。

かくて、海岸、まったく、しづまりゆけば、こなた、かなたの漁家の窓よりは、燈（ともしび）の光見え、沖の小島の松の上には、滿月（まんげつ）

の影（かげ）涼し。

暑中休暇

の影（かげ）涼し。

拜啓。暑中休暇となってから、暑さが、とりわけ、きびしうございますが、御さはりはありませんか。御たづね申し上げます。私は、一週間ほど前から、兄といっしょに、ここに、まねってゐます。

ここはさびしい漁村ですが、海岸のながめもよく、氣候の變化（へんか）も少くて、まことに、よい所です。とりわけ、海は遠淺で、波は靜（しづか）で、底はこまかい砂ですから、海水浴をす

家の窓よりは燈の光見え沖の小島の松の上には淡月

水泳理科

るには、しごく、適當（てきとー）な所です。それですから、このごろは、諸方から、來て、海水浴をするものが多くて、なかなか、にぎやかです。」

私も、日日、兄と、海に出て、小板にすがりながら、水泳をれんしゅーしたり、魚や貝などを捕って、實物について、兄から、理科の話を聞いたりして、樂しく、日を送ってゐます。ただ、君がゐたらと、そればかり、殘念に思ってゐます。

まづは、暑中御みまひかたがた、御たより

匆匆

申し上げます。なほ、くはしい事は、近日、歸宅のうへ、御話申しませう。また、日記は、御約束どほり、御めにかけるつもりで、毎日、怠らず、つけてゐます。匆匆。

八月二十日　　三浦　勉

山中孝吉君

第十五課　ふかに追はれた話。

ある年の夏、汽船が、大西洋海岸の、ある港に、とまってゐた。その日は、たいそう、暑い日で、乘組の人人は、「どうして、しのいだら、よからうか。」と、苦んでゐた。

畫すぎになって、船長は「泳ぎたいものは泳いでもよい。」といふゆるしを出した。人人は、たいそー、喜んで、着物を脱いで、ざんぶざんぶと、海にとびこんだ。そして、いろいろな泳方をしてゐるのが、いかにも、おもしろさうである。中にも、ことに、おもしろさうなのは、まだ、年のいかん二人の子どもで、きゃっきゃっと、笑って、しきりに、うきをめあてに、泳ぎくらをしてゐる。その子どもの一人は、この汽船の大砲掛(がかり)の子である。

大砲掛(がかり)の子は、はじめには、ずっと、相手(あひて)を、ぬいてゐたが、きかから三十間ばかりの所で、きゅーに、相手(あひて)に、ぬかれてし

勵

まった。相手(あひて)は、おほかた、勝をえようとしてゐる。大砲掛(がかり)は、これまで、にこにことして、二人の様子を見てゐたが、今、じぶんの子の負けさうになったのを見て、「おーい。どうしたのだ。負けるな。負けるな。」といって、しきりに、勵ましてゐる。

ちょーど、そのとき、「ふかだ。ふかだ。」といふ、恐ろしい聲が聞えた。すぐ、近所で、泳いでゐる人人は、あわてて、みな、汽船に、泳ぎもどった。子どもらは、まだ、なにも知らずに、泳いでゐる。

四五町むかふに、せなかだけ見せて、泳いで來るのは、な

叫

るほど、見るも恐ろしい、大きなふかである。ふかは、だんだんと、子どもに近づいて來る。

大砲掛（がかり）は、氣が氣でない。ただ、こんかぎりの聲を出して、「むきをかへよ。むきをかへよ」と叫んでゐる。しかし、その聲も、子どもらの耳にははいらんのか、まだ、きゃっきゃっと、笑って、泳いでゐる。

助のぼーとはおろされた。しかし、とても、まにあひさうにもない。ふかは、いよいよ、子どもに、せまった。子どもは、はじめて、それを知って、逃げようとしてゐるが、とても、にげおほされさうにもない。

側　　撃

あー。このとき、大砲掛(がかり)の心は、どんなであったであらうか。

大砲掛(がかり)は、ふっと思ひついて、大砲の側に寄った。そして、いそいで、丸(たま)をこめて、きっと、ねらひをつけた。いふまでもなく、ふかを撃たうとしてゐるのである。しかし、丸(たま)が、子どもにあたるよーなことはあるまいか。

助のぼーとは、まだ、よほど、遠い。ふかの口は、もう、子どもにつきさうである。

「あっ。」と、みんなが叫んだとたん、ずどーんと、一發、すさまじい音がした。

大砲掛(がかり)は、すぐ、手で、顔をかくした。人人も、みな、息をつま

らせた。

しばらくの間、海は煙におほはれた。しかし、その煙の消えるにつれて、まづ、目にはいったのは、あの、恐ろしい、大きなふかの死骸であった。

喜の聲は、どっと、一度に、あげられた。

子どもは、助のぼーとに乘せられて、歸って來る。大砲掛は、大砲にもたれて、無言で、それを見つめてゐる。

第十六課　動物の體色。(一)

すべて、動物は、どんな動物でも、たやすく、他の動物におそはれないために、また、たやすく、他の動物をおそふこ

都合

色

大根

暮

とのできるために、それぞれ、都合のよい用意のそなはつてゐるものであるが、なかで、もっとも、都合のよいと思はれるのは、その體色についての用意である。

動物の體色は、たいてい、その住んでゐる周圍の色に似てゐるものである。たとへていへば、田の中にゐる蛙は土色で、木の葉の上にゐるあまがへるは緑色であり、菜の花にとまるちょーちょは黄色で、大根の花にとまるちょーちょは白色である。

また、日中、暗い所に、かくれてゐて、日暮から、食をもとめに出る鼠蝙蝠などは、いったいに、黒ずんだ色で、海の底の

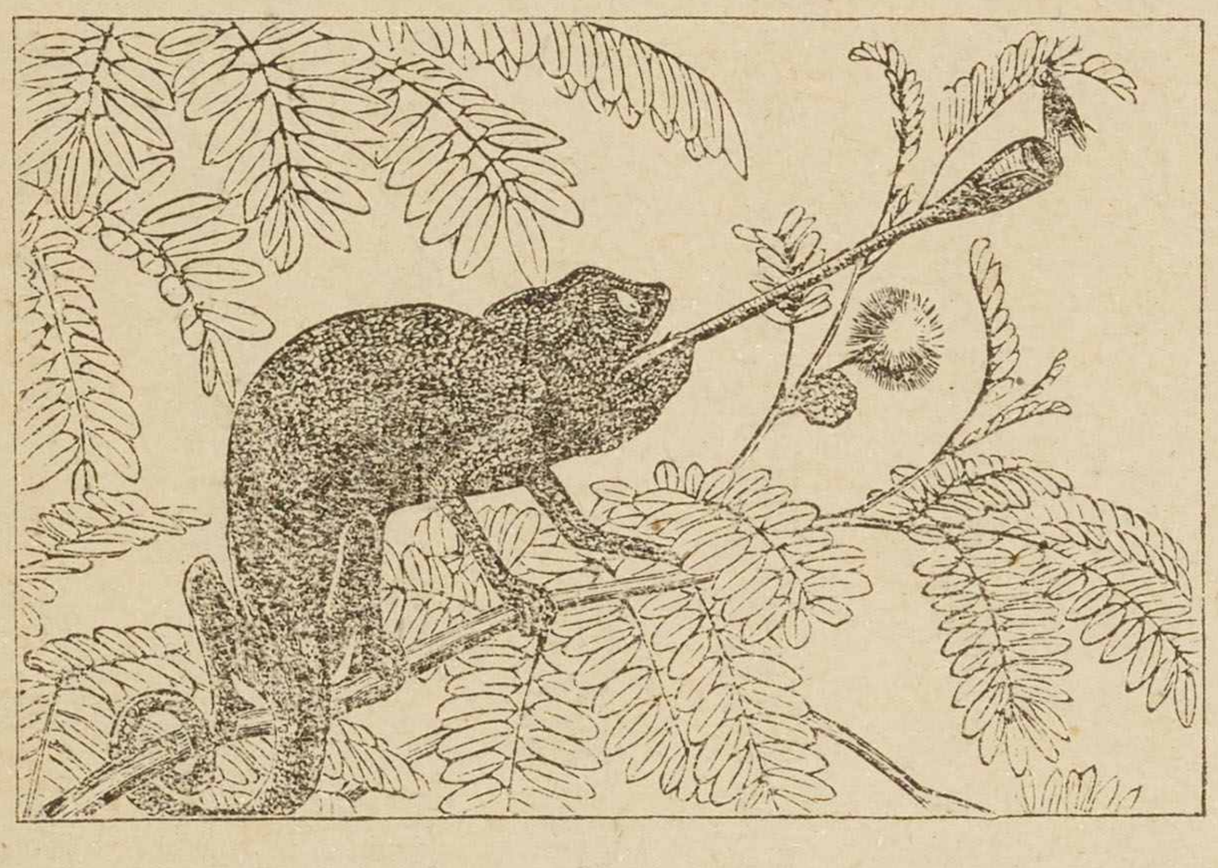
周圍

砂の上にすんでゐるひらめ、かれひなどは、そのかたかはの色が、砂の色に似てゐる。

このよーに、動物の體色が、そのすんでゐる周圍（しゅーい）の色に似てゐるので、しぜん、その周圍（しゅーい）のものとまぎれて、たやすくかくれて、他の動物にみつけられるよーなことがない。したがって、他の動物におそはれることも少く、また、他の動物をおそふこともできるのである。

さて、この類の體色を、學問上では、保護色といふのであるが、なかには、周圍の色のかはるにしたがって、この保護色のかはるものさへある。たとへていへば、北國にすむ

野兎（うさぎ）は、ふだんは、茶褐色（ちゃかっしょく）であるが、雪の降るころになる



野兎（うさぎ）は、ふだんは、茶褐色（ちやかつしよく）であるが、雪の降るころになると、白色にかはり、いかは、水中に浮いてゐるうちは、水色であるが、岩などにくっつくと、岩に似た色にかはる。

このほか、あふりか地方に産するかめれおんといふ動物も、また、保護色のかはる動物である。かめれおんは、とかげの一種で、ふつーに、木の上などにすんで、蠅（はへ）などを捕へて、食物としてゐるのであるが、その體色が周圍の色のかはるに

色のかはるものさへあるたとへていへは北國にすむ

害桑

したがって、眞黑にも、綠にも、金色にも、自由に、かはるといふことである。

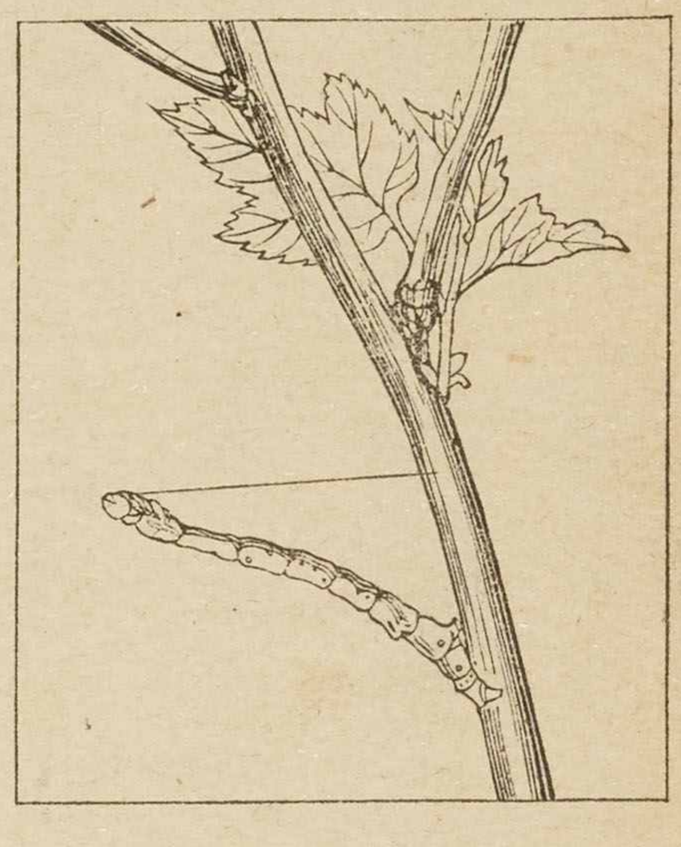
第十七課　動物の體色。(二)

さて、前にのべた保護色のかはるといふのは、ずいぶん、都合のよい用意であるが、これよりも、なほ、いっそー、都合のよいと思はれることがある。それは、ただ、保護色ばかりではなく、その動物のみぶりによって、形までも、その周圍のものに似ることである。

たとへていへば、桑の木の害をするえだしゃくとりは、その體色が桑の木に似てゐるばかりでなく、また、圖のよ

たに、體の後端を桑の木につけ、なな

裏　表



ーに、體の後端を桑の木につけ、ななめに、體をつき出して、休んでゐると、まるで、桑の木の小枝のよーに見える。ある地方では、このえだだしゃくとりのことをどびんわりともいってゐるが、それは、農夫などが、ときどき、これを小枝とまちがへて、土瓶をかけて、わることがあるからだといふことである。

また、沖縄などに産するこのはちょーは、そのはねの表には、美麗な彩色があるが、裏は、枯葉に、よく、似てゐるので、それが、次の圖のよーに、はねをとぢて、木の枝などに、と

嫌

まってゐると、まるで、枯葉のよーに見える。

また、動物によっては、以上のべたものとは、まったく、はんたいに、體色がそのすんでゐる周圍のものと、まぎれないで、たいそー、鮮明(せんめい)なものがある。こんな體色のものは、たいてい、他の動物の恐れる武器をもってゐるか、または、他の動物の嫌ふ惡味(あくみ)、惡臭(あくしゅう)などのある動物であって、他の動物は、その體色によって、たやすくこれをみつけて、寄りつかないよーにする。したがって、その動物

臭

は、じぜん、身の安全をたもつことができるのである。たとへていへば、しりに、毒のあるはりをもつてゐる蜂は、その體色が、黄と黒とのだんだらになつてゐて、惡味のあるあげはのちょーは、そのはねに、鮮明な彩色がある。

また、あめりかに產するすかんくといふ動物も、この類の動物であつて、他の動物が近づくと、肛門のあたりから、非常に、臭い液を出すのであるが、その脊に、白黒の、太い縱筋がとほつてゐるの

尾

で、他の動物は、たやすく、これをみつけて、寄りつかないよーにする。

この類の體色を、學問上では、警戒色（けいかいしよく）といふのである。

第十八課　虎（トラ）。

虎（トラ）ハ、インドニ、モットモ多ク、スメル猛獸（モーシュー）ニシテ、身ノ長サハ五尺バカリ、尾ハ三尺バカリアリ。ソノ形ハ、ホトンド、猫（ネコ）ニコトナルコトナシ。

虎（トラ）ノ毛色ハ、オホムネ、光澤（コータク）アル黃色ニシテ、横ニ、多クノ、太キ黑線（コクセン）アリ。サレバ、ハナハダ、鮮明（センメイ）ニシテ、ヨーイニ、認（ミト）メウベキガゴトクナレドモ、虎（トラ）ハ、多ク、竹林ノ中ニスム

適牙

虎(トラ)ノ顎(アゴ)ニハ、上下トモノ牙ハスルドク、ヤヤ、カギノゴトク、曲リテ、動物ノ肉ヲモノナレバ、コノ黒線(セン)、アタカモ、竹ノ影(カゲ)ノゴトク見エテ、ヨーイニ、ソノ所在ヲ認(ミト)メガタシトイフ。

虎(トラ)ノ頭ハ、短クシテ、圓シ。コレ、顎(アゴ)短クシテ、ソノ顎(アゴ)ヲ動カス筋肉(キンニク)ノ太キガタメナリ。スベテ、カカルモノハ、猛獸(モウジュウ)ニ多クシテ、強キ力ヲ出シテ、物ヲカムニ適セリ。

虎(トラ)ノ顎(アゴ)ニハ、上下トモニ、左右ニ、一本ヅツ、太キ牙アリ。ソ

舌

サクニ適セリ。マタ、舌ニハ、猫ノゴトク、ザラザラシタル、コマカキ突起アリ。コノ突起ハ、ミナ、後ニ向キテ、骨ニツキタル肉ヲナメトルニ適セリ。

爪

マタ、虎ノ足ニハ、猫ノ足ノゴトク、裏ニ、柔キ肉アリ、先ニ、隱顯自在ナルスルドキ爪アリテ、他ノ動物ニシノビ寄リ、ゴレヲ捕フルニ適セリ。

羊

虎ハ、キハメテ、餓ヱタルトキニハ、鼠ノゴトキ、小サキモノヲモ捕ヘ食ヘドモ、ツネニハ、牛、馬、鹿、羊ノゴトキ、ヤヤ、大ナル獸類ヲ捕ヘ食フ。コレヲ捕フルニハ、物陰ニカクレヰテ、ソノ來ルヲ待チ受ケ、猫ノ鼠ヲ、捕フル時ノゴト

殺

ク、フイニ、トビカカリテ、ソノノドニ食ヒツク。カクテ、コレヲ、足ニテ、オサヘ、頸(クビ)ヲフリナガラ、ソノ肉ヲサキ食フナリ。サレバ、虎(トラ)ノ頸(クビ)ト足トハ、ソノ筋肉(キンニク)ト骨格(コッカク)トモニ、太ク、強クシテ、ヨク、牛、馬ノゴトキ、大ナルモノヲモ、口ニクハヘナガラ、走リ去リ、鹿、羊ナドノゴトキハ、前足ノ一打ニテ、殺スコトヲウトイフ。

虎(トラ)ハ、カク、恐ロシキ猛獸(モーヂュー)ニシテ、マタ、人ヲモ捕ヘ食フコトアリ。インドニテハ、虎(トラ)ノタメニ殺サルルモノ、年年、七八百人ニオヨブトイフ。サレバ、インドノ人ハ、コノ害ヲノゾカンガタメ、マタ、ソノ皮ヲエンガタメニ、種種、工夫

ヲコラシテ、コレヲ狩ル。

サレド、虎ハ、性質(セイシツ)怜悧(レイリ)ナルノミナラズ、マタ、前ニノベタルガゴトク、ソノ身體ノ構造(コーゾー)、キハメテ、生活(セイカツ)ニ適セルガユエニ、タクミニ、人ノ攻撃ヲマヌカレテ、今、ナホ、多ク、生存セリ。

攻撃

第十九課　風。

諸子、こころみに、家のうちの、あひ隣(とな)れる、大小の二室をえらびて、障子(しょーじ)、ふすまをしめきり、その小室の内に、大いなる火鉢(ひばち)をすゑて、さかんに、火をおこし、その室の、じゅーぶん、あたたまりたる時、大室と小室との間に、立てたる

傾坐

ふすまをすこし、開きて、圖のごとく、鴨居に近き所と、敷居の上とに、火をともしたる蠟燭を置きて、しづかに、その焰の動く樣を見よ。

さすれば、上に置けける蠟燭の焰は、傾かならず、小室の方へ、傾くべし。また、小室に、坐するものは、つめたき空氣の、大室の方より、入り來ることを感ずべし。

焰は、かならず、大室の方へ、傾き、下に置ける蠟燭の焰は、

位置說明

今、蠟燭の焰の、位置の上下によりて、かく、傾きかたをことにするは、いかなる理由によるかを說明せん。

すべて、空氣は、冷ゆれば、こく、重くなりて、下方へ、おり、暖まれば、うすく、輕くなりて、つねに、上方へ、のぼるものなり。しかして、空氣、暖まりて、上方へ、のぼるときは、他の、冷えたる空氣は、そのあとをうづめんとして、動き來るものなり。

かの、上に置きたる蠟燭の焰の、大室の方へ、傾くは、暖まりたる空氣の、上にのぼりて、大室の方へ、動き出づるがためにして、かの、下に置きたる蠟燭の焰の、小室の方へ、

傾くは、大室の、冷えたる空氣の、小室の方へ、動き來るが

方向

傾くは、大室の、冷えたる空氣の、小室の方へ、動き來るがためなり。

風は、ひっきょう、この理によりて、おこるものにして、地球上の、ある地方の空氣の、太陽の熱にて、暖まり、上にのぼりて、他の地方に、動き去り、他の地方の、冷えたる空氣の、そのあとをうづめんがために、地球の表面を傳ひて、動き來るをいふなり。かくて、われらは、空氣の、地球の表面を傳ひて、動き來る方向によりて、北風、南風などと稱(しょう)するなり。

風は、時としては、暴風(ぼうふう)、颶風(ぐふう)となりて、農作物を荒し、樹木(じゅもく)、

不潔

生活

垣根を倒し、屋根をまくり、船をくつがへすなど、われらに害をおよぼすことあれども、多くは、ほどよく、吹きて、氣候をやはらげ、雨を運び來りて、植物の生育を助け、不潔なる空氣を吹きはらひ、道路、洗濯物などのうるほへるを乾かし、帆前船を走らするなど、われらに利益を與ふること、はなはだ、多し。

第二十課　天氣豫報と警報。

われわれは、空氣の中に、住んでゐるものであるから、空氣中の現象、すなはち、晴れる、曇る、雨が降る、風が吹くといふよーなことは、われわれの生活のうへに、非常に、關

係のあることである。したがって、それを、まへもって、知ると

氣象調査電報

生活いふよーなことはわれわれの生活のうへに非常に關係のあることである。したがって、それを、まもって、知るといふことは、大いに、必要なことである。

學問上では、空氣中の現象を氣象といふ。氣象臺や測候所はこの氣象を調べる所である。

わが國では、東京に、中央氣象臺があり、各府縣に、すくなくとも、一箇所は、測候所がある。各府縣の測候所は、その地方の氣象を調べて、これを、日に、三度づつ、電報で、中央氣象臺に報告する。中央氣象臺は、東京地方の氣象を調べて、それと、各府縣から報告してきたものとによって、毎日、その日の午後六時から、その翌日の午後六時までの、

掲示

全國の氣象を考へて、これを、電報で、各測候所に報知する。これを全國天氣豫報といふ。各測候所は、この全國天氣豫報によって、その地方の氣象を考へ、また、中央氣象臺も、東京地方の氣象を考へて、これを報知する。これを地方天氣豫報といふ。全國天氣豫報や地方天氣豫報は、中央氣象臺、測候所、または、他の役所などの前に、掲示することになってゐるので、われわれは、これを見て、あしたの仕事などを、まへもって、きめることができるのである。

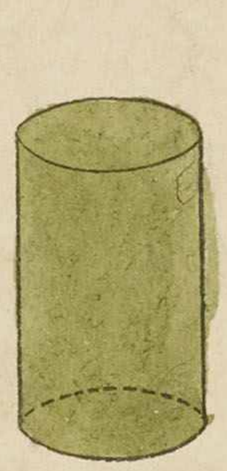
また、中央氣象臺は、その調によって、もし、「ある地方に、暴風、暴風雨などが起りさうだ。」と思ふときには、すぐ、電報で、

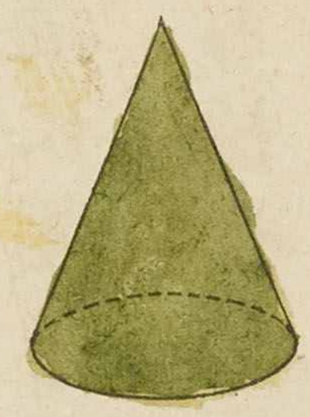
そのことを各府縣の測候所などに報知する。これを暴

暴風雨などが起りさうだと思ふときには、すぐ電報で

避　掲

そのことを各府縣の測候所などに報知する。これを暴風警報といふ。この警報を受けると、そこの測候所や信號所では、すぐに、そのしるしを掲げる。このしるしは、警報の種類によって、いろいろあるが、おもに、畫は、赤い球、圓筒形のもの、圓錐形のものなどを用ひ、夜は、紅燈、緑燈などを用ひることになってゐる。





それで、沖へ、出ようとする船は、このしるしを見て、出ることを見合せ、また、航海してゐる船は、早く、港へはいって、難を避けるのである。

げんに、この警報（けいほー）があることになってから、船のこはれたり、沈んだりすることが、たいそー、すくなくなったといふことである。

第二十一課　海國男子。

わが住む日本帝國の
四面は海に圍まれて、
いづくに、行くにも、棹（さを）、楫（かぢ）を
借らで、進まん道あらず。」
この海國に、生れたる
日本男子は、國のため、

波路（なみぢ）をおのが家として、

日本男子は國のため、

覺悟

住まん覺悟を定むべし。」

練習

恐れず、進む勇氣こそ、

幼き時の練習に

よりて、えらるる身の寶。」

泳の業も怠るな。

ぼーとの遊もこゝろみよ。

日本は海の國なるぞ。

海はわれらの家なるぞ。」

港

軍艦

任務

構造

第二十二課　ワガ國ノ海軍。

ワガ海軍ハ、沿岸ノ海ノ防禦ノ上ヨリ、全國ノ海岸、海面ヲ四ツノ海軍區ニ分チ、海軍區ニ、一ツヅツノ軍港ヲ置ケリ。軍港ニハ、オノオノ、鎮守府アリテ、ソノ海軍區內ノ軍務ヲ取扱フ。ワガ、七十餘ノ軍艦ハ、オホムネ、分レテ、各鎮守府ニ屬セリ。

軍艦ニハ、戰艦、巡洋艦、砲艦、通報艦ナドノ種類アリテ、オノオノ、ソノ任務ヲコトニシ、マタ、ソノ構造ヲコトニセリ。

戰艦ハ、軍艦中、モットモ、優勢ナルモノニシテ、敵ノ軍艦、砲

厚

運送

速力

臺ヲ破壊スルヲ任務トス。サレバ、戰艦ニハ、イヅレモ、巨大ナル大砲ヲスエツケ、マタ、艦ノ外部ハ、キハメテ、厚キ鋼鐵ニテ包マレタリ。敷島、富士ナドハコレニ屬ス。

巡洋艦ハ、軍艦中、モットモ、任務ノ多キモノニシテ、戰時ハ、敵ノ港灣、軍艦ノ情況ヲサグリ、アルヒハ、ワガ運送船、商船ヲ保護シ、アルヒハ、敵ノ運送船、商船、マタハ、コレヲ保護スル敵艦ヲ破壊、捕獲シ、平時ハ、外國ニアル、ワガ國民ヲ保護シ、マタハ、近海ヲ警戒スルガタメニ、時時、巡航スルコトナドヲ任務トス。サレバ、巡洋艦ハ、イヅレモ、ソノ艦體大ニシテ、多量ノ石炭ヲ積ミ、ハヤキ速力ニテ、長時

河

命令

間、航海スルコトヲウルヨーニ、造ラレタリ。淺間(アサマ)、八雲(ヤクモ)ナドハコレニ屬ス。

砲艦ハ、戰時ハ、島ノ間、大河、マタハ、淺海(センカイ)ナドニ進ミ入リテ、敵ノ軍艦、砲臺(ホーダイ)ヲ破壞(ハカイ)シ、平時(ヘイジ)ハ、ワガ國沿岸(エンガン)ノ海ヲ警戒(ケイカイ)シ、マタ、外國ノ大河、淺海(センカイ)ニ沿(ソ)ヘル地ニアル、ワガ國民ヲ保護スルヲ任務トス。サレバ、艦體輕ク、小サクシテ、船足(フナアシ)淺ク、造ラレタリ。筑紫(ツクシ)、宇治(ウジ)ナドハコレニ屬ス。

通報艦ハ、敵ノ軍艦、マタハ、敵國沿海(エンカイ)ノ地ノ、防禦(ボーギョ)ノ情況(ジョーキョー)ヲサグリテ、ワガ軍艦ニ通報シ、アルヒハ、ワガ軍艦ノ命令、通信ナドノ取次ヲナスヲ任務トス。サレバ、艦體、ハナ

組織

ハダ、輕ク、速力、マタ、ハヤクシテ、通報ニ、便利ナルヨーニ、造ラレタリ。宮古(ミヤコ)、千早(チハヤ)ナドハコレニ屬ス。

コノ他、海防(カイボー)艦、水雷(スイライ)母(ボ)艦、驅逐(クチク)艦ナドアリ。マタ、水雷(スイライ)艇(テイ)トイフモノアリ。水雷(スイライ)艇(テイ)ハ、形體(ケイタイ)、ハナハダ、小サケレドモ、速力、キハメテ、ハヤクシテ、雨、雪ナドノ降レル日、霧(キリ)ノタテル日、マタハ、夜明、日暮、暗夜(アンヤ)ナドニ乘ジ、魚形(ギョケイ)水雷(スイライ)ヲ發射(ハッシャ)シテ、敵ノ軍艦ヲ破壞(ハカイ)スルモノナリ。

コレラ、各種類ノ軍艦ハ、前ニイヘルゴトク、オホムネ、分レテ、各鎭守(チンジュ)府(フ)ニ屬シ、二隻(セキ)以上ヲモッテ、艦隊ヲ組織シ、ソノ海軍區內(クナイ)ノ海上、沿岸(エンガン)ノ海ヲ巡航(ジュンコー)シテ、警備(ケイビ)ノ任ニア

タル。ナホ、コノホカニ、鎮守府ニ屬セズシテ、アルヒハ、戰時ノ演習ヲナシ、アルヒハ、時時、內國、外國ノ、沿岸ノ海ヲ巡航シテ、航海、商業ヲ保護スルコトナドノ任ニアタル艦隊アリ。コレヲ常備艦隊トイフ。

をはり。

国立国語研究所
1000605418
72430

明治三十六年十一月四日印刷
明治三十六年十一月六日發行
明治三十八年十二月五日翻刻印刷
明治三十八年十二月三十一日翻刻發行

著作權所有

明治三十八年十二月二十七日
文部省檢査濟

著作兼發行者　文部省
翻刻發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　愛敬利世
東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百。八番地
發行所　博文館
東京市日本橋區本町三丁目八番地
發賣所　東京市日本橋區新右衞門町十六番地
株式會社國定教科書共同販賣所

高等小學讀本三

定價金八錢

0. 0
24